源流の四季

第18号（2005年7月）夏
Summer

発　行　所／多摩川源流研究所　〒409-0211 山梨県北都留郡小菅村4383
TEL 0428（87）7055　FAX 0428（87）7057
http://www.tamagawagenryu.net
E-mail:genryu@mxa.cosmo.ne.jp
発行責任者／中村文明
協　　力／多摩川源流協議会（塩山市・奥多摩町・丹波山村・小菅村）
多摩川源流観察会
印　　刷／（株）サンニチ印刷

大田川・三段の狭（撮影：中村文明）

Contents 目次

国土創発・源流再生シンポジウム……2
森林再生プロジェクト……4
ホンダ「企業の森づくり」へ……5
多摩川下流の水害（1）……6
花と緑の郷づくり活動……7
多摩川源流写真展……7
秋のイベント案内……8

全国で源流の可視化事業推進を

国土創発「源流再生・流域単位の国土の保全と管理に関する調査」のシンポジウムが、三月十六日から十七日の二日間、島根県中山間地域研究センターで開催され、全国各地から九十名が参加し、源流再生のため源流の可視化事業や流域圏アプローチによる国土管理の推進など今回の調査の成果と課題を報告しあい、今後の源流のありかたを熱心に議論した。このシンポジウムは、国土施策創発調査を実施した環境省・国土交通省・林野庁をはじめ、発案者の小菅村、源流研究所、全国の源流域の自治体・市民グループ、東京農業大学、島根県中山間地域研究センター等が協働で開催したもの。

全国源流再生シンポジウム開催
源流にとって画期的な出来事

島根県で開催された全国源流再生シンポジウム（3月16日）

全国の源流域には、国民生活に不可欠である水資源や森林資源が存在するが、人口減少による国土管理の担い手不足や源流文化の衰退など様々な困難な課題が山積している。こうした中、小菅村の発案により、環境省、国土交通省、林野庁などの省庁連携による「源流再生・流域単位の国土の管理と保全」に向けた国土施策創発調査が平成十六年九月に開始され、各分野の調査活動を通して、流域圏アプローチによる源流の可視化事業や上下流連携推進の新たな施策が提起された。省庁連携による全国的な「源流再生プロジェクト」が開始されたことは源流にとって画期的な出来事といえる。

元気な源流を

シンポジウムでは、この調査の中心になった環境省自然環境局の佐藤寿延課長補佐が、挨拶に立った。佐藤補佐は「流域圏に関する調査や自然環境に関する調査、森林再生に関する調査など各分野の調査が実施されたが、その調査によって得られた成果を明確にし、今後の源流地域の活性化に向けた課題と取り組み、とりわけ具体的なアクションを出し合おう」と強調した。

続いて各分野からの調査報告が行われた。アジア航測からは「源流の自然環境に関する調査」が、NPOひろしまねと島根県中山間地域研究センターから「源流の資源・文化に関する調査」が、法政大学から「源流景観の記録手法」が、東京農業大学と源流研究所からは「源流を中心とした流域圏に関する調査」が、林野庁と林政総合研究所から「源流の森林再生調査」が、国土交通省から「上下流連携に関する調査」がそれぞれ報告された。

源流の風土記づくり プロジェクト

特に力点が注がれた「源流の風土記づくり」（源流資源の科学的な記録）と「源流の可視化事業」に関心と注目が集まった。「源流の風土記づくり」プロジェクトは、源流域の自然や文化や歴史などの資源を調査、記録し、短時間では風化しない科学的なデータとして蓄積することが目的。源流域の自然環境の現況や自然環境の過去からの遷移等について記録し、内容を整理した上でGISデータとして整備を図る。

この基盤環境データが整備されれば、情報の発信と共有化が図れると共に、今後、多摩川源流域で自然再生事業を推進していくうえで、もともとの源流の姿や源流らしさを再生するための科学的なバックデータとなりうるものである。

また、今回の調査手法について整理し、源流自然環境調査の手引きをとりまとめることにより、各地の源流域において同等の調査の展開を可能とするものである。

源流の可視化事業プロジェクト

情報化社会の中にあって、源流域の情報が中下流域に伝わらない現状がある。二級河川の流域の殆どが、県境や所管の枠組みなどの壁によって幾つもに分断されており、県境などの壁は情報の壁になっている。流域の多くの市民が、源流に関する必要な情報を持ち得ていない中、源流に関する情報が必要なときいつでも入手できる情報システム、いわゆる源流の可視化プロジェクトは、極めて重要な課題である。

今回の調査を通して各プロジェクトと連動し、源流域を中心として分野・地域・時代を横断する広範な情報共有のプラットフォームを構築する事業が進展しつつある。WebGISは、インターネット上の地図を媒体として、参加型で双方向の情報交換が可能であり、今までにない現場と密着した情報システムとして期待できる。

森林再生プロジェクト

今回の調査は、零細で管理意欲が乏しい民有林を対象に、土地所有者に代わって森林の管理を図る仕組みを構築し、国土の保全を図ることが目的である。全国9個所で既存文献調査と現地ヒヤリング調査を実施するとともに、小菅村と奈良県川上村でモデル事業を行った。

小菅村における森林再生プロジェクトは、①ボランティアによる間伐モデル林の整備、②森林GISの整備の二つの事業を実施した。

川上村の活動は二次林を自然林に再生する「源流学の森づくり」と原生林を保存管理し、その生態系を観察・学習する場として整備する「水源地の森」づくりを柱にして、こうした活動を促進するための基礎データとなる林相調査の二つのモデル事業を行った。

国土施策創発調査研修会（小菅村）

ネットワーク形成プロジェクト

今年度の調査では、全国の源流域が連携して再生を図るための行政の組織「全国源流の郷協議会」を組織し、これと市民の組織である全国源流ネットワークや学識者からなる連携組織を創設し、行政、民間、学識者などの協働による枠組みと体勢を確立して全国の源流域の再生を図ることがその目的であった。

この国土創発調査を通して源流域の地方自治体による「全国源流の郷協議会準備会」が創設され、また、民間団体の全国源流ネットワークはその組織を広め、特定非営利活動法人として認証されるなど、全国の源流域が連携して源流再生を目指す仕組みづくり、組織作りが進展したことは、今後の源流再生プロジェクトにとって大きな意義を持つものである。

国土創発研修会であいさつする佐藤課長補佐（小菅村）

上下流連携プロジェクト

過疎化が進行する源流域の現状について流域全体が認識を深めるとともに、市民が流域人であることを自覚してもらうために、上下流連携促進に向けての全国調査を実施した。

全国で行われている水源地域と下流域が連携した交流体験や地域づくりなどの上下流連携の現状を明らかにし、連携の基本理念は何か、連携が地域に及ぼす効果は何かなど上下流連携の推進方策についての基礎資料を整理した。

上下流連携に関する今後のアクションプランに関しては、河川や雨量の情報の提供、HPによる情報ナビゲーションシステム、人づくりの側面的支援、森林保全と河川・ダム管理に関する一層の調査研究などが検討された。

「森林再生プロジェクト」開始へ

小菅村と多摩川源流研究所は、地球温暖化防止・森林整備や国土保全を目的に、平成十五年よりスギやヒノキの人工林を対象にした「森林再生プロジェクト（日本財団助成事業）」十カ年事業に取り組んでいるが、五月二十八日に今年度の「森林再生プロジェクト」・緑のボランティア事業を開始した。

「森林再生プロジェクト」十年かけた森づくり

この事業は木材の大量輸入等による木材価格の低迷から、村内の民有地のスギやヒノキなどの手入れが行き届かず、長期間放置されたため森林が荒れている現状を改善し、温暖化防止や国土保全に貢献する健全な森林を整備することが目的である。いうまでもなく森林は、木を育て、水を蓄え、空気をきれいにし、地球の温暖化を防ぐなど、重要な公益的機能を有している。健全な森林を育てていくことは川や海、ひいては私たちのふるさとを守る大切な事業である。

当日の午前十一時、小菅村役場に「森林再生プロジェクト」に参加するために多摩川流域の緑のボランティアがぞくぞく集結した。年度始めの事業説明会では、東京農業大学の宮林茂幸教授と菅原泉助教授が、日本の森林の現状や森林整備事業の意味、森林診断の意義とその内容、間伐の必要性、今後の森林整備の目標などについて、分かりやすく解説した。

森林再生プロジェクト説明会（5月28日・小菅村）

森林診断白書作成と森林整備事業

宮林教授は、「小菅村の森林再生事業の実施にあたって、特に重視したことは民有林の実態調査と今後の森林整備の目的を明確にすることであった。そのため、専門家による森林診断白書を作成し、実際のスギやヒノキの現状を科学的に把握する調査活動に取り組んできた」と小菅における森林再生事業の特徴に触れた。

菅原助教授は、森林診断白書づくりについて「具体的には人工林内の数箇所を調査地に設定し、半径五メートルの棒の一端を水平に伸ばして、中心点を軸に一回転し、棒が描く円内に入る立木を全部測定する円形標準値法を実施した。これにより、実際の一ヘクタールあたりの立木本数が確認でき、調査に基づいて今後の作業内容を示す処方箋が作成できる。この処方箋が大切である」と森林診断の意義を強調した。

また、宮林教授は「今後小菅村の森林を生産林、経済林として育てていくのか、将来的には環境林、環境材として管理していくのか等、各民有林ごとの実態と問題点を掴み、ゾーニングの導入などを検討している。こうした森林診断に基づく森林再生プロジェクト事業は全国的にも珍しい」と述べた。

「参加と連携と協働」

挨拶に立った小菅村の青柳論源流振興課長は、「多摩川源流一帯は東京都の水源地帯である。小菅村は水源の村として美味しい水を創り、綺麗な水を下流域に届けたいと思っている。人口の減少が続き千人を切る状態であるが、交流人口を増やして元気な源流の村を創りたい」と参加者を歓迎した。

源流研究所の中村所長は「今、山村に住む人々だけでは森林を守れない。多摩川源流域に広がる水や森は流域社会共有の財産である。この共有財産を流域全体が協働で守る仕組みづくり・組織作りに努力している。市民と森林組合と専門家と自治体による参加と連携と協働こそこの森林再生プロジェクトの推進のカギである」と強調した。

午後から、森林組合・林業家の指導を受けながらヒノキ林の間伐に取り組んだ参加者は、「一本一本間伐が進む毎に森が明るさを取り戻した。自分の活動が森に活かされているという実感を体で感じた。とてもいい汗をかいた」と笑顔を見せていた。

間伐にとりかかる参加者

「ホンダ・企業の森づくり」へ

多摩川源流の森林保全活動を継続

小菅村は、三月十六日に本田技研工業と財団法人オイスカとの間で「多摩川源流・企業の森づくり」に関する契約を締結した。オイスカとホンダ自動車は、五月十四日、小菅村の村有林で第一回植樹活動を社員五十名が参加して実施した。

現地で行われた開会式で、廣瀬文夫小菅村長は「小菅村は、村の面積の九十五パーセントが森林だ。いま木材価格の低迷によってスギやヒノキの森林の管理が放置されている。これを改善しようと流域の緑のボランティアと一緒になって森林再生プロジェクトによる健全な森づくりに着手している。

今回のホンダの企業の森づくりは、広葉樹の森を育てて水源涵養に役立つ森づくりをめざす取り組みである。多摩川源流の豊かな森林づくりに大きく貢献するものである。これを契機に都市の農山村の交流が一層進展することを期待する」と激励した。

続いて、ホンダの社会活動推進室坪川幹雄主任とオイスカの田中美津江さんが挨拶した。坪川さんは「当初参加者を募集したとき、何名の参加者があるか不安だったが、ふたを開けてみたら定員を大きくオーバーしていた。今日の参加者は選ばれた幸運な方々です。怪我がないよう自然を味わいながら活動してください」と参加者を労った。

この後、参加者は、地元森林組合の指導で、急な斜面に二本一本カエデの苗木を植えて、鹿の食害防止のウッドガードを丁寧に苗木に覆っていた。

一本一本心をこめて植林（5月14日）

急な斜面に汗をかく参加者

落葉広葉樹を育成

ホンダの「企業の森づくり」の事業目的は次の通り。

(1)ホンダがオイスカと連携して、小菅村において地元住民と協力し、植林・下草刈り、間伐などの森林保全活動を継続的に実施すると共に、都市と農山村との交流を図り、社員の森林保全に関する理解を促進する。

(2)落葉広葉樹を中心とした水源涵養機能の高い森林を育成し、都の水源である多摩川源流の森林を保全することを目的とする。

(3)実施内容は、2005年から2012年までの七年間、村有林三ヘクタールに植林・下草刈り、間伐などの森林保全活動を実施する。

地球温暖化防止へ県民集会

県民三百五十名が参加

山梨県森林組合連合会などが主催する「森林による地球温暖化防止県民集会」が、五月二十四日、甲府市ホテル紫玉苑で開かれ、温暖化に関する講演会とパネルディスカッションが行われた。地球温暖化防止に向けた森林整備のありかたを話し合うのが目的で、県内の森林組合の関係者や市民、市町村関係者など三百五十名が参加した。

講演に立った岡田憲和林野庁林政部企画課長は、「二月に発効した京都議定書により日本は温室効果ガスを六%削減すると約束したが、その内、三・九%は森林による吸収効果が期待できる」と指摘し、環境税の必要性を訴えた。

辻一幸早川町長がコーディネートしたパネルディスカッションには、多摩川源流研究所の中村文明所長、オイスカ山梨県支部の田中美津江さん、北都留森林組合の長田助成専務理事がパネラーで出席。中村所長は、「源流域の住民だけで森を守ることは難しい。流域の市民に呼びかけて森林再生プロジェクトを実施している。多くの市民に森林の持つ大切な機能を理解してもらい温暖化防止の取り組みを進めたい」と小菅村と源流研究所の活動を紹介した。

温暖化防止へ県民集会（5月24日）

シリーズ

多摩川下流の水害 ～其の一～

地域史研究家・多摩川流域ネットワーク代表　長島　保

両岸に同じ地名の残る多摩川（丸子橋下流）

（一）あばれ川・多摩川

日本の多くの河川がそうであるように、多摩川もまた、昔から大雨が降るたびに出水・氾濫を繰り返す「あばれ川」であった。山がちのわが国では、河川は急流のうえに、すぐ海に注ぎこんでしまう。そのためふだんは安定していても、いったん豪雨が集中すると一気に増水して氾濫した。多摩川も近年までは例外ではなかったのだ。

（二）両岸に残る同じ地名

各種スポーツ・文化施設や庭園などがあり、川崎市民の憩いの場となっている等々力緑地の大半は、川崎市中原区等々力の町名だ。ここは、かつて堤外といわれ、多摩川の河川敷であった。この対岸にも、世田谷区等々力という町名がある。実は地図のうえで、多摩川両岸の地名を注意深く見ていくと、それぞれの対岸に同じ地名や類似の地名が存在することに気が付く。そのような例を拾いあげてみると、別掲のようになる。

下流に限ってみても、これだけある。どうしてなのだろうか。

これこそ大洪水によって多摩川の流路がしばしば付け変わったことを教えてくれる。方向を転じた流路がひとつの村の土地を分断してしまったからだ。

この多摩川の流路変遷については、いままでに南流説、北流説と色々いわれてきた。また、中世末から近世にかけて、川筋の付け変わりにともなう地境争論が頻発したことが、各地の古文書などに残されている。その都度、分断された土地の帰属をめぐって両岸の住民たちは激しく対立した。このように、流路の付け変えを引き起こすほどの大洪水が、この流域では幾度も発生していたのだ。

〔右岸〕	〔左岸〕
川崎市多摩区布田	東京都調布市布田
川崎市多摩区和泉	東京都狛江市元和泉・中和泉
	東和泉・和泉本町
川崎市高津区宇奈根	東京都世田谷区宇奈根
川崎市高津区瀬田	東京都世田谷区瀬田
川崎市高津区下野毛	東京都世田谷区野毛・上野毛
川崎市中原区上丸子	東京都大田区下丸子
・上丸子山王町	
・上丸子天神町	
・上丸子八幡町	
・中丸子	
川崎市中原区下沼部	東京都大田区田園調布
	↓（旧地名）上沼部
	田園調布南・本町
	↓（旧）下沼部
川崎市幸区古市場	東京都大田区多摩川
・東古市場	↓（旧）古市場

（三）府県境界の確定

ところで近代に入り、神奈川県と東京府との境界は一応多摩川と決められていた。だが、先に見たような形で同じ地名が両岸に見られるのは、実際には江戸時代からの旧慣による村々の飛地が、河身の両側に点在していたからだ。それは、長い間の流路変遷によって形成されてきたものだ。これが洪水時には、行政上の管轄違いから大きな障害となっていた。そのため、後に触れる明治四十・四十三年の大水害を機に大問題となり、これらの飛地を整理する府県境界変更を求める運動が起こった。それは、多摩川改修運動の一環として展開されたのだ。

一九二（明治四十四）年一月、政府と国会に対して、飛地を抱える多摩川沿岸五ケ町村の代表らによって、「東京・神奈川府県町村区域変更ニ関スル請願書」が提出された。そのなかには、「犬牙錯綜セル」飛地の実情とそれによる影響が縷々述べられている。同時に「多摩川治水河身改修国庫支弁に関する請願」も行われた。また、この請願に先立って神奈川県橘樹（たちばな）郡役所が、飛地の戸数・人口・地籍反別などを調査している。

なお、一九二（明治四十五）年四月一日には、「東京府神奈川県境界変更ニ関スル法律」が施行され、多摩川の河身中央線を府県境界とすることが確定し、両岸に散在する飛地は総て整理された。この時の地名が、その後も継承され、今日でも先に見たような同じ地名を残しているのだ。（つづく）

流域市民の憩いの場（等々力緑地）

花と緑あふれる小菅村へむけて

小菅村を花と緑の郷にしようと昨年五月に花と緑の郷づくり協議会が発足した。郷づくりの検討会を重ね、小菅村の花木の整備計画を立てるとともに、ボランティアによってその手入れをすることが決定し、三月二十七日に小菅村民九十名が参加しグリーン作戦が行われた。

小菅の四季を美しく

花と緑の郷協議会では小菅村の中の花木をより美しくし、村を訪れた方に楽しんで頂くために花木の整備と四季折々の美しい花木を紹介する活動を行っている。具体的には、村の主要道を紅葉街道・紫陽花街道にするための取り組みや、植栽されている花木の手入れ、三つ子山へ周遊コースを作るための検討である。

会の活動はボランティアを中心に行い、現在九十名以上のボランティア登録がある。会の活動資金は花と緑の基金を創設し、会の活動に賛同する方からの寄付によってまかなっている。五月四日に行われた第十九回多摩源流まつりでは活動紹介ブースを設け、来場者から十二万円以上の寄付を頂いた。

アサガオの植え替え（小菅村）

グリーン作戦を実施

それぞれの取り組みはボランティアが集合し、花木の手入れするグリーン作戦を年に三回行い推進してゆく。第一回グリーン作戦では紅葉・紫陽花の移植、花木への追肥、三つ子山に自生するミツバツツジを元気にするための除伐を実施した。

ボランティアは「みんなで作業すると楽しい、作業した場所のこれからが楽しみ」と感想を述べた。会では十一月三日のクリーン・グリーン作戦でも広くボランティアを募っていく方針。

お問い合せ　（財）水と緑と大地の公社（小菅の湯）
☎0428-87-0888

大田区で「源流写真展」を開催

「知られざる源流の四季」をテーマにした「多摩川源流写真展」（主催小菅村・源流研究所）が、大田区西大森のこらぼ大森を会場に開催された。会場には、中村所長がとりためた源流の写真を二十二点展示し、普段は見ることのない源流の姿と四季の移り変わりを紹介した。

また、六月十二日には、同会場で「多摩川源流の魅力」と題して中村所長が講演した。

開催に当たっては、こらぼ大森運営協議会が共催し、大田区、大田区教委委員会、国土交通省京浜河川事務所、川崎とどろき水辺の楽校、こまえ水辺の楽校がそれぞれ後援した。

きおびにチャレンジ　読売文化センター金町

五月二十一・二十二日に読売文化センター金町「多摩川源流を歩く」が小菅村で開催された。参加者二十人はきおび編みを行い、小菅川源流を散策した。参加者はきおび編みに初挑戦し、縁を止める作業に苦戦していたが、その難しさが逆に楽しかったようだ。

きおび編みを楽しむ参加者

小菅村を満喫　自然派クラブ生協

六月七日に小菅村を訪れた自然派クラブ生協の参加者二十名は中村源流研究所長の講演を聞き、手打ちソバや小菅の湯を楽しんだ。

「自然派クラブ生協の参加者」

参加者募集！秋のイベント案内

源流ソバ作り体験
あなたも今日からソバ名人

自分の手でソバを蒔き、ソバ打ちに挑戦してみませんか？種蒔きから刈り取り、ソバ挽き、ソバ打ちそして試食まで一連の体験を行います。製粉した粉をお持ち帰りもできます。ソバは比較的簡単に栽培できますが、収穫と脱穀には多少労力が必要です。種まきから二ヶ月くらいで可憐な花が咲き、畑一面が白一色に覆われ、約七十日で収穫できます。作業のあとには「小菅の湯」で疲れを癒してください。

収穫の喜びは何ものにも変えがたいものがあります。あなたも美味しい秋ソバを堪能してみませんか。

日時／八月十二日(金)作付け
十月二十日(木)刈り取り
十一月四・五日(金・土)
脱穀・製粉・ソバ打ち
集合／JR奥多摩駅午前十時
費用／二万五千円(種代・管理費・宿泊費・保険料・指導料など)
定員／十五名(先着順)

紅葉色づく
源流・大菩薩探訪の旅

東京都水源林の広がる南大菩薩を登るコースです。水源林にはモミジなどの落葉広葉樹が多く自生しているので、色とりどりの紅葉が楽しめます。コースは六時間程度です。お泊まりは小菅村内の旅館ですので源流ならではの味と人情に触れることが出来ます。登山のあとは温泉につかり疲れと汗を流します。源流の秋をあなたの目で確かめてください。

日時／十月二十二日(土)～二十三日(日)
集合／JR奥多摩駅午前十時
費用／一万三千円
(宿泊費一泊四食付き・保険料・温泉代・その他)
対象／山歩きに自信のある六十九歳以下の方
定員／三十名(先着順)

新企画
こんにゃく作り体験ツアー

小菅村では平らな土地が少なく、畑の多くは山の斜面に作られています。このような畑は地味が悪く、栽培できる作物は限られています。その一つがこんにゃく芋です。こんにゃくは茹でたこんにゃく芋をすり潰し、灰の煮汁を加えて固めたあと、形を整えて茹でます。

手軽に作るにはこんにゃく芋をすりおろし器ですりますが、このツアーではこんにゃく芋を臼と杵ですりつぶし、昔ながらのやり方でこんにゃく作りを体験します。

また、ただ体験するだけでなくこんにゃく畑の見学や昔から続く源流域の生活をご紹介します。

作ったこんにゃくはおみやげとして持ち帰りいただけます。きおび編みも行いますので、あなたの作った世界にただ一つのきおび編み細工もおみやげとなります。

こんにゃく作りを通して、源流の生活に触れましょう。

日時／十一月十九日(土)～二十日(日)
集合／JR奥多摩駅午前十時
費用／二万五千円
(宿泊一泊四食付き・材料費・指導料・保険料・その他)
定員／二十五名(先着順)
お問い合せ・申し込み
小菅村役場源流振興課
☎0428-87-0111

干し柿作り体験開催予告

例年好評を得ている源流・干し柿作り体験ツアーを今年も十一月頃に開催します。

柿の木から柿をもいで、皮をむき干すところまでを体験します。一ヶ月程度柿を干し、出来上がった干し柿は後日お宅へお届け致します。

これまでは小菅村と源流研究所が主催していましたが今年は小菅村観光協会(電話0428-87-0741)が主催します。申し込み・お問い合せ先などが変更になりますのでご注意下さい。

日時などの詳細は後日告知致します。皆様のご参加をお待ちしております。